

平成26年 11月28日	病害虫発生予報 12月号	茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会
-----------------	-------------------------------	------------------------

今年の防除作業を振り返り、次作に向けて日誌を準備する等、
よりよい防除へつなげましょう！

< 目 次 >

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
イチゴ：ハダニ類	1
促成ピーマン：うどんこ病	1
【その他の病害虫】	2
イチゴ，促成ピーマン	
【防除所レポート】	
本年のナシ黒星病の発生状況について	2
本年産の大豆子実に発生した主要な病害虫について	4
II. 今月の気象予報 5	
最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。	
詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。 茨城県病害虫防除所 Tel:029-227-2445 予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。 ホームページアドレス http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/	

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 11月下旬現在、寄生葉率(本年値9.4%、平年値7.9%)は平年よりやや高く、発生地点率(本年値89%、平年値44%)は平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生が少ないうちに防除を徹底する。
② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、気門封鎖剤を除いて同一系統・同一薬剤の連用を避ける。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

促成ピーマン

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 11月下旬現在、発病度※(本年値2.8、平年値2.5)は平年並である。
※発病度：病斑をもとに算出した発病の程度を表す数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
② 罹病部は新たな伝染源となるため、できるだけ取り除いてハウス外に持ち出し、適切に処分する。
③ 薬剤散布は、薬液が葉裏によくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤耐性菌の発生を防ぐため、異なる系統の薬剤を用いてローテーション散布する。
④ 天敵を導入しているハウスで薬剤防除を行う場合は、天敵への影響に十分注意する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや少ない	11月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
促成ピーマン	アザミウマ類	発生量：やや多い	11月下旬現在，平年よりやや多い発生である。

防除所レポート

本年のナシ黒星病の発生状況について

【発生経過】

本年の黒星病は，5月下旬は平年並～やや少ない発生でしたが，葉では6月下旬から，果実では7月下旬から発生が増加し，7月下旬の発病果率は多発した平成24年よりも高くなりました(図1，2)。

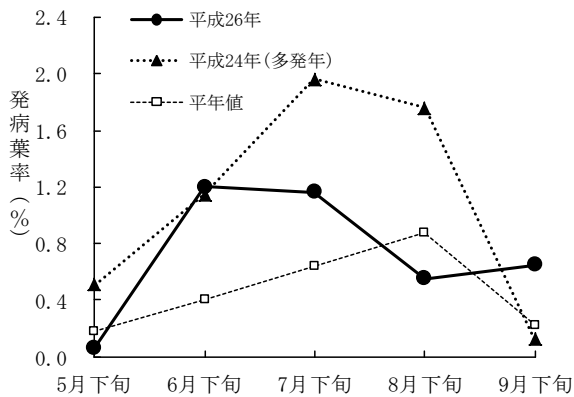


図1 葉におけるナシ黒星病の発生推移

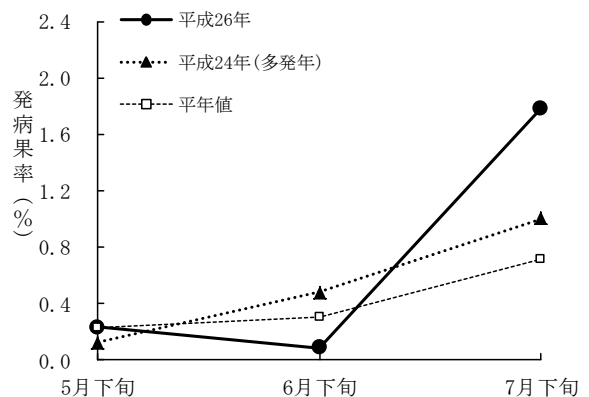


図2 果実(幸水)におけるナシ黒星病の発生推移

【発生要因】

黒星病はカビの一種による病害であり，第一次伝染源の種類には，①芽(花そう)基部上に形成される分生子と，②落葉上に形成される子のう胞子とがあります。①は，秋型病斑上に形成された分生子が，10～11月の降雨により鱗片に感染して越冬し，翌春に芽基部上に形成されます。②は，秋型病斑が発生した落葉上に3～5月に形成され，好適な温度・湿度条件になると降雨の度に飛散します。

本年のナシ黒星病の発生状況について（続き）

本年の芽基部病斑(①)の発生は平年よりやや少なかったため(表), 本年の黒星病の第一次伝染源は子のう胞子(②)が中心であったと考えられます。

例年, 子のう胞子の飛散は3月下旬~4月中旬頃から始まり, 5月上中旬頃までに終息を迎えます。一方, 本年は4月4日に飛散が始まり, 例年より遅い5月下旬まで飛散していました(図3)。このため, 5月下旬に感染し, 6月下旬に葉での発病が急増したと考えられます。

さらに, 6月は降水量および降雨日数が平年より多く, 葉や幼果の病斑上に形成された分生子による二次伝染を助長する条件となりました。また, 降雨日が連続し, 適期に薬剤散布ができなかったことも, 多発要因の一つとして挙げられます。

表 芽(花そう)基部のナシ黒星病発病率と発生地点率

	発病率(%)		発生地点率(%)	
	平成26年	平年	平成26年	平年
4月	0.1	0.2	5	22
5月	0	0.1	0	15

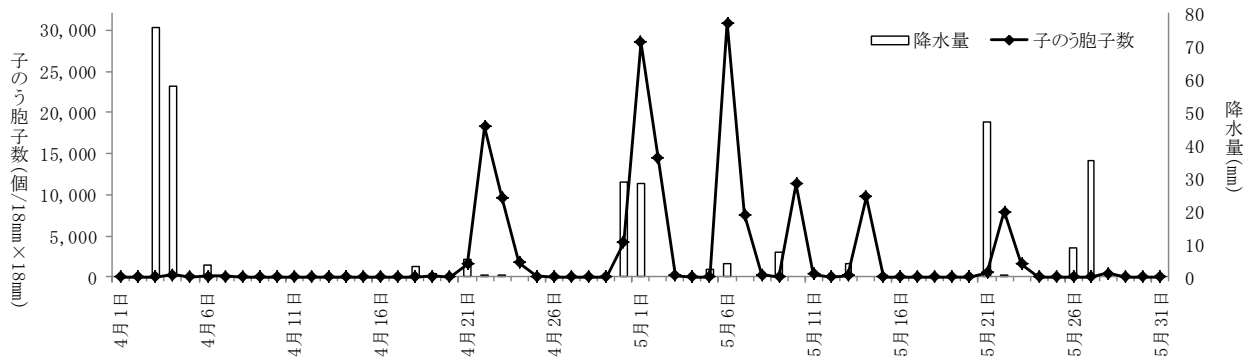


図3 平成26年におけるナシ黒星病菌子のう胞子の飛散状況(園芸研究所調べ)

【今後の対策】

本年10月中旬に行った調査では, 黒星病の秋型病斑の発生が平年より多い結果となりました(平成26年10月24日発表 病害虫速報 No.8)。上述のとおり, 秋型病斑が発生した落葉は翌年の伝染源となるため, 落葉処理を必ず行いましょう。

本年産の大豆子実に発生した主要な病害虫について

県内 13 圃場における平成 26 年産大豆子実の主要な病害虫の発生状況についてまとめました（表）。

病害では、べと病（写真 1）が「納豆小粒」の子実で平年より多く発生しました。生育期の調査では、8 月下旬は平年並の発生でしたが、9 月下旬には平年より多い発生となりました。べと病が多発生した要因としては、8 月下旬から 9 月中旬まで曇りや雨の日が多く、気温も平年と比べて低く、べと病の発病に適した温度（20～25℃）条件であったためと考えられます。一方、紫斑病による被害粒の発生は平年並でした。

虫害では、マメシクイガによる被害粒は平年並の発生でした。また、吸実性カメムシ類による被害粒は過去 11 年中最も少ない発生でした。ツメクサガ、オオタバコガ等のチョウ目害虫の圃場での発生は、8 月下旬に平年よりやや多くなりましたが、9 月下旬は平年並に落ち着き、被害粒（写真 2）の発生は平年並となりました。

表 平成 26 年産 大豆分解調査結果

病害虫名	被害粒率(%)			発生地点率(%)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
べと病(納豆小粒)	7.8	2.0	1	100	86	1
紫斑病	0.3	0.9	6	46	47	6
マメシクイガ	2.1	2.2	4	38	68	11
吸実性カメムシ類	0.7	3.3	11	62	88	10
ツメクサガ, オオタバコガ等の チョウ目幼虫	0.1	0.1	4	23	12	3

1) 平年：平成 16 年～25 年(10 年間)分のデータの平均値。

2) 順位：過去 11 年間における本年値の順位を示す。

調査圃場：県内 13 地点の大豆圃場（「タチナガハ」9 地点、「納豆小粒」4 地点）

調査方法：1 圃場当たり 10 株の上位 20 莢程度(合計 200 莢程度)を採集し、子実の被害を目視で調査した。

採集時期：平成 26 年 10 月下旬



写真 1 べと病による被害粒

- 葉や子実が発生する。子実では、種皮に亀裂を生じ、乳白色～黄褐色の菌糸でうすく覆われる。



写真 2 チョウ目害虫*による被害粒（食害痕）

*ツメクサガ, オオタバコガ等

- 莢や子実が食害される。子実に食害痕が残る場合や着色粒となる場合がある。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 11月29日から12月28日)

気象庁(11月27日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	40	40
降水量	関東甲信全域	20	40	40
日照時間	関東甲信全域	40	30	30

[特に注意を要する事項]

期間の前半は、気温の変動が大きいです。1週目前半は高く、1週目後半から2週目前半にかけては低い見込みです。

[概要]

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 11月29日(土曜日)から12月5日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年より高い確率50%

<2週目の予報> 12月6日(土曜日)から12月12日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または低い確率40%

<3週目から4週目の予報> 12月13日(土曜日)から12月26日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。